

深井純一先生のご退職にあたって

國廣 敏文*

今日は深井先生の最終記念講演ということで学部を代表して先生のご経歴をご紹介させていただきます。

先生は1964年、東京大学農学部をご卒業後、同大学大学院農学系研究科で農業経済学の研究を重ねられ、1970年4月、立命館大学産業社会学部助教授として29歳の若さで赴任され、今日に至るまで35年間、教鞭をとられてきました。

先生が本学に着任されて以降の日本社会は、1950年代半ばからの高度経済成長を経て、戦後復興を達成し、国民は一応の“豊かさ”と“繁栄”を享受できるようになり、いわゆる「先進国」の仲間入りをするようになりました。しかし他方、急速な経済成長の中で、労働環境や雇用構造の変化、都市化や情報化の一層の進展（居住空間や生活スタイルを含む）生活環境の大きな変化を経験しました。その結果、都市、とりわけ大都市への一極集中化が生じる一方で、地方や農村の空洞化・過疎化、高齢化という問題や、公害をはじめとする環境問題の悪化とその全国化が起きました。

深井先生は、こうした時代の変化とそこから生まれ出た諸問題と課題を、「地域社会」、「生活と経済」、「環境や農業」などのキーワードを並べながら、特に、地方や農村の周辺化という視点から取り上げたり、さらには公害や災害時の問題をどう考え、それに対して我々はどう行動すればいいのか、地域住民が協力・連帯しながら、どのように自ら自立していくのか、いけるのかということ、地域や農村や企業、海外でのさまざまな調査研究で得た成果をもとに、一貫して提起され発言されてきました。それを地域住民や学生と一緒に考えて、汗をかいて奮闘してこられたところに先生の先生らしさがあると考えています。1999年には、先生の水俣病研究の集大成としての『水俣病の政治経済学—産業史的背景と行政責任—』という研究によって、東京大学から博士号（農学）を授与されています。

地域や社会とのつながりの面でも、1990年には自治体研究所常任理事、93年には長野県伊那郡阿智村の社会環境アセスメント委員会副委員長、2005年に関西学院大学災害復興制度研究所客員研究員を務めてられました。

産業社会学部では「地域計画論」を長年ご担当になり、その後、カリキュラム改革があつて名称

* 立命館大学産業社会学部長

は変わっていますが、現在は「農村環境計画論」や「環境問題論」をメインに担当され、多くの学生や院生を育ててくれました。そして、沢山の先進的かつ実践的な実績と教訓を残されました。例えば、①着任以降、毎年、農村での調査の実施、その報告書をまとめて地域に返していく活動、②90年度から、学生の自学自習を助けるために図書館の利用の仕方を述べた「図書館探索法」の作成（『産業社会学部で学ぶ』に収録）、③大学の大講義においてもさまざまな創意工夫をされ、特別講師を招いたり、ビデオ上映などをやってくれました。

学内の教学をささえる点でも1997年度に学生主事を務めてくれました。先生は何よりも学生を大事にし、学生のエネルギーと行動力、柔軟な発想に依拠しながら、学生と一緒に（先生も学生みたいところがありますけど）、取り組んでくれました。1993年度より始まった父母教育後援会の学部長表彰の制度の中で、深井ゼミが最優秀賞5回、優秀賞3回を受けたことにも、先生の熱意は現れています。まさに先生にとってゼミは「生きた証」であり、「誇り」だと思います。ゼミ生の皆さんも誇りにしていると思います。

先生をご紹介する場合、先生の“ユニークさ”に触れないわけにはいかないだろうと思います。先生はいろんな意味で“ユニークな”大学教授だと思います。特に先生は飛び抜けて変わっています。先生は私以上に声が大きい。自信に満ちた発言、先生から「そんなことをしてはいけない」と言われると、「そうなのかな」と思ってしまう。服装もおしゃれで、ハンチングを被ったり、ある時期には、お寺のお坊さんのような作務衣を着ておられたりしました。好き嫌いがはっきりしておられる性格でもある。人の嫌がることでも、正しいことは真正面から堂々と述べる。論争、議論の仕方にも“深井スタイル”がありまして、決して群れない。“一寸の虫にも五分の魂”という雰囲気、弱い人の味方をして「社会正義」を盾に議論するのが深井先生のスタイルだったと思います。逆に言うと、しょっちゅうあちこちでぶつかりますし、喧嘩もします。本学部においても先生は、「トラブルメーカー」でした（笑い）。先生は「闘う」ことが好きなようにも見えます。私は、ある意味で、深井先生をととても羨ましいと思ったこともあります。言いたいことを堂々と言う、何ものにも縛られない、“自由さ”と自主性を堅持しておられる。先生が何をいっても、「深井先生だから…」ということで許容される。それもお人柄だと思います。

とはいえ、先生は“骨太さ”以上に、繊細で生真面目で心優しいところがある方です。先生の研究成果の表題に現れているように、「震災に奔走した少年たち」、「最前線に立った中学生たち」、「青少年の」という形容詞が論文の題についています。私には、先生の若者たちへの期待を表しているように読み取れます。その他の論文では、「新しい住民」、「環境にやさしい」、「震災救援」、「奉仕活動」、「小さな村の大きな」などは、周辺部からの、あるいは若い人たちに対する、先生の問題関心や立場が現れているのではないかと思います。

未来を担う若者とともに、その先頭に立って闘う。都市化の波の中で、ともすれば取り残され忘れられた地域や農村に、智慧と力を注ぎ込んで、胸を張って自立をめざす。まさに先生は“万年青年”，弱いものを守る“ガキ大将”として、リーダーとしての役割を果たしてくれましたし、きっとこれからもそうだと思います。

このように深井先生は、教育・研究、社会調査や社会貢献の面で大いに活躍されてきました。先生は今年、定年を迎えられますので、「どうも先生お疲れさまでした。これからゆっくりなさってください」と申し上げたいところですが、まだまだお元気ですし、じっとなんかしていません。今後は、我々教員の“先輩”の立場で、学部教育にも大所高所から、お力添えをいただきたいと思っています。私たち学部の人間といたしましては、先生が取り組んでこられた課題を、それぞれの立場で引き受けながら、今後の研究の推進と学部・大学院教育に邁進しなければならないと決意を新たにしているところです。

個性派の先生であり、いろんな意味で“名物教授”でもある深井先生が、こうして定年を迎えられたことは、一つの節目であるといいながら、さびしいものがありますが、4月から立命館大学名誉教授とされます。その意味では立命館大学との関係は「永遠のもの」となるわけです。

私はここで、これまでの先生のご業績と活動に敬意を表しますとともに、本学部ならびに大学へのご貢献に感謝をいたしたいと思います。先生、これまで35年間の長きにわたってご尽力いただき本当にありがとうございました。以上をもって学部を代表いたしまして、先生のご経歴のご紹介と先生への謝辞といたしたいと思います。